

荒井寛方「滞印所見」(抜粋)

『美術面報』(第42編巻4、大正8年2月13日掲載エッセイ(部分))

印度の風光

滞印一年半。私は、印度大陸の自然と美術とに、可なり親しく接して来たのである。

印度と聞けば、瘴癘熱苦(*しょうれいねつく)の域、猛獣毒蛇の危険を、直ぐに連想するのが、邦人一般の常である。渡印以前の私もやはり其の一人であった。

併し、足一たび其の境に入ると、予想に違うことが決して少なくはなかった。田舎の家造りや、田野のさまには、日本のそれと、さまでに異ならぬものが多く、時には、思わず、自らの身が、我が郷国に在るかの感じを懷いたこともあった。

印度の気候は、暑熱期、雨期、冷涼期の三つである。が、国の面積は広く、山河の形勢に種々異なる処あり、北に雪峯の峻を負い、南、漫々たる大洋に面する、其の間、或は肥沃の田圃、茫漠たる荒野、若しくは大なる森林あり、ために気候に、差異多く、細かに分てば、一年を六季に区別し得るそうである。

樹木は、海に近い地方では、椰子属のものがあって、熱帯地の気分を呈して居るが、内地に入れば、名高い榕樹や菩提樹の類、美しい果実がみのるマンゴーなどが多く、葉肉の厚い常磐木が生い、野には、牛山羊水牛などが悠々と牧草に腹を充たせて、大自然の恩恵に嬉々として居るさまは、さすがに大陸的の寛やかな感じを与える。

ヒマラヤの麓に近い、北部の地方では、冷涼期になるに、昼間の暑さに引かえて、夜は、可なりに衣を重ねなければならぬ程であるが、南方の平原地方では、最も寒い季節でも、恰も日本の三四月、花咲き鳥も歌うという、好い気候と同じ位の温度であるから、此の上もなく、自然の賜物の豊かな国土である。

アヂヤンターの洞窟

滞印中、私は、アヂヤンター洞窟の壁画を模写するために、約三ヶ月間、そこに住んでいたのである。アヂヤンターは、ジャルガンという鉄道停車場から、三十五哩ほど離れた土地にあるので、此の道路は、概ね平坦にして、馬車で約一日の行程に適し、又道のはかどりは遅いが牛車も通って居る。

此の街道を進んで行くと、洞窟から一里半程てまえの平野に、ただ一軒の旅舎めいたものが建てられてある。これは、アヂヤンターを訪れる旅客のため、特に政府の手で設けたもので、吾々一行も、この家屋内に滞留して、毎日々々、洞窟へ通って、模写の業を続けたのである。

此の旅舎から洞窟へ行く路は、山間の溪流に沿って居って、さまで高峻ではないが、山脈が連亘(*れんこう)し、その起伏せる様も趣深く、遠く平野を見下せば、際涯を知らぬ一望坦々、実に自然の雄大なる情調が、味われる。此の路には、昼間は、鹿や兎が多く徘徊し、大きい猿などが群り、孔雀や其の外の珍しい鳥が、岩間や梢に姿を見せる。その他にも殆んどあ

らゆる種類の、鳥や獣が栖んでいて、のどかな生を楽しんで居る様が面白い。が、夜間は猛獣出没し、殊に豹の類が多く、日没後は、官命にて厳に外出を禁じてある位、危険の地域である。

有名なる此の洞窟は、山の中腹に位し、流に沿って景色絶佳の閑境に造られてある。私の初めて辿り着いたのは、第十番の洞窟であった。其の内にある壁画を見たその刹那、言や筆では現わし得ない感じがあった。今まで吾が邦で、これが写真のみで、親し味を懐いていたのが、今、目前、其の実物に接したこととて、恰かも百年の知己にでも会ったようで、何故ともなく、感激の涙の落つるを禁じ得なかったのである。

洞窟中、此の十番と次に見た九番とが、最も古いものと言われて居る。次には、一番の洞窟を訪れ、それより順を追うて、巡覧したのであるが、中には建造半ばのままで止められたものもあり、又、その内の彫刻にも半成のものがある。殊に壁画中に、半ば描きかけて止めたものがあって、これらは、線描きのみで、未だ着色が施されて居らず、ために手法を知るに至極好都合であった。

壁画の様式は、種々様々で、柱の画や模様など、様式を研究するだけでも、よほど有益なことである。洞窟内は、殆んど総て壁画が描かれてあるが、甚しく剥落した部分が多い。図様は、雄大且つ自由で、全く大陸的である。書籍の挿画や写真のみで見ると、よほど俗悪なもので、面白からぬ感じのするものではあるが、親しく実物に面接すると、崇高なる念自から生じ、尊嚴の感も起って、敬意を表せざるを得ないようになった。

勿論、窟内総ての絵が、悉く優秀であるというわけではなく、実際、俗悪な、芸術的価値の乏しいものがないでもないが、概して印象の深い作である。

又、彫刻中にも優れた作があり、規模雄大にして、代表的とすべきものがある。

吾等は、此の閑寂境にある洞窟へ日毎に通い、薄暗い室内で、静かに壁画模写の業を成したのであって、今にして其の当時を回想すると、実に無限の感懷禁じ難い次第である。着印の最初、此の地附近が、一帯に、ペストの流行地であることについて、甚しく恐怖の念を懐いていたのであるが、慣れるに従い、さまでの気遣いもなくなり、自然の恩光に浴して、無事に、此の業を完成し得たのは、最も喜ばしいことで、滞印中にも、殊に此のアヂヤンターの三ヶ月は、私に取って、永久に忘れ得ない感興に充ちた生活であった。

仏跡参拝

私は、夙に仏教に対して、崇敬の念を懐いて居り、従って、仏跡参拝は、多年の宿望であったが、今回、この願を遂げ得たのは此の上もない幸であった。

仏陀巡化の地域は、北部のヒマラヤ山脈に近い方面で、印度全土から観れば、割合に小さい部分で、仏誕地のルンビニーは、現時は、ネポールに属している。仏跡地には、一二の彫刻がある位で、特に観るべき美術品は現存して居らない。

漢訳仏典で鹿野苑と称している、シャーラナートは、ベナレス附近にあって、ここには、博物館が設けられてある。ここに陳列してある、グプタ朝時代の彫刻は、吾が邦の藤原時代の如く、華美なる風の発達した、柔か味に富んだ作品である。又、阿育王の塔もあり、それには

模様が施されている。

仏陀伽耶には、仏塔が現存し、玉垣もあり、阿育王式の彫刻が施されてある。ここには、小さい家屋があって、内には、少数の彫刻が陳列してある。此の外、仏跡地には、彫刻はあまり遺って居ない。

ナランダ寺の旧址は、目下発掘中であって、ブロンズ(青銅)の仏像が、大ぶん多く掘出されるそうで、私が印度で、銅仏を見たのは、これが始めである。石彫や塑像も、可なり発掘されるが、絵画は一点も出ない。

古美術巡覧

印度滞在中、私は、重にカルカッタのタゴール家に起臥して居ったのであって、同家には、美術品も多く蔵せられているが、絵画で最も古いのは、モール朝時代のもので、それ以上の古いものは見られない。

カルカッタの博物館には、古代の印度彫刻が多く、最も古いバルフートの遺品を始め、以下、時代順に分けて一通り陳列してあって、此の地では、必ず観るべき場処の一である。ここにはモンゴル朝の絵画もあって、特別観覧の手續を経たものには見せることになって居り、又、波斯（＊ペルシャ）時代以降の、各地の彫刻遺物を、分類してある故、研究上有益なる資料である。

或時は、ヒマラヤ山に近い、田舎に杖を曳き、自然の風光を賞したこともあった。

秋涼の頃からは、旅に出て、諸処の勝区故跡を歴覧したのであるが、その中で、特に記憶に遺った場処を挙げると、オリッシャ州のプリと呼ぶ土地には、ジャーナートテンプルとて、印度教の一大本山たる寺院がある。二百有余の末寺を有する大伽藍で、堂内には、多くの彫刻があるそうだが、該教の制度として、外教徒の入寺を、厳に禁じてあるので、残念ながら、吾々は、その門に施された、少々の彫刻を見るに止めなければならなかった。此の町で一の面白いことは、新しく、壁に画くのを仕事としている多くの絵師の住居が、軒を並べていることで、何れも看板として壁画を出し、神像の画を売って居る。町の情調に、昔の様がうかがわれて、興味の深い土地である。

ここから、二十哩ほど、海岸に沿うて北へ進んだ処に、カナラという寺院がある。土地の人は、仏教の寺だと云って居るが、それらしくもなく、さりとて、印度教と思われる点もないようで、所属の宗派は明かでない。此の寺にある彫刻は、なかなか優れた作で、両性交会の像などもあり、肉体美の發揮に努めた作品もある。故岡倉氏も、特に此の寺を訪れて、研究の資に供せられたとのことであって、私もここへは再度訪問の機会を得た。[後略]